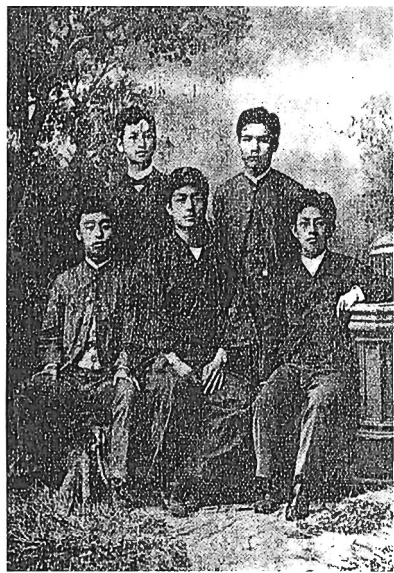


その離熊は惜しまれた。同年11月発行の『龍南会雑誌』（第68号）に「中川賀来先生を送る」という文章が載っている。その著者は、教育家はその功績が大であっても一般の人々には知られず、平々凡々の名の下に一生を終わるのを常とするもので、「名利汲々たるの輩焉んぞ此職を盡すを得んや、只それ名利の汚流に超然として拮据数年、其守る処愈固く其執る処愈強きものに於いては、之を望むに暁天の星の如し、我中川賀来二先生の如きは真個に斯道に忠なるもの」と述べ、さらに賀来について、「資性温厚にして着実の風あり、先生は我校独乙語の祖栄と云ふべく、先生の薫陶を受けたる者、或は大学に入り、或は大学を卒へて社会に闊歩するもの挙げて数ふべからず、…」とその功績を讃えた。

三高時代の彼はドイツ語科の長老として重きをなしたが、その町儒者風の恬淡とした性格は、東大独文科出の若い教師たちの世渡り上手とは対照的であった。しかもそうした旧タイプの教師の人間ばなれしたところが、却って生徒たちに好かれ、忘れがたい印象を残した。賀来が亡くなったのは1939年（昭和14）2月1日。享年80。墓は京都市左京区黒谷町30番地の瑞泉院に、女子教育に一生を捧げた妻常子のそれと並んで建っている。

ベルリンの日高眞実



留学時代の日高眞実とその友人たち
前列左から、沢柳政太郎、日高、清沢満之
後列右から、上田万年、岡田良平

我が国で教育学専攻者にしてドイツに留学したのは、旧高鍋藩教授日高誠実の長子・日高眞実（1864-1894）を以て嚆矢とする。彼は帝国大学で哲学を修め、大学院に入り教育学を専攻した。明治1888年（明治21）7月選ばれて教育学研究のため独逸国へ留学を命じられた。留学先はベルリン大学で、3年間6学期を学んだ。明治25年2月帰国し、高等師範学校教授兼文科大学教授に任じられた。留学中は専門の学を究めて倦むことなく、また鋭意ドイツの教育の現状を観察した。これが原因で遂に肺病に罹ったと伝えられる。さてここでは学会月報にベルリンから寄せた日高自身の書簡と、当時同じくベルリンに留学中だった友人たちの見た日高の動静の一端を紹介してみたい。

学会月報第20号（明治22年10月）に「在伯林会員日高眞実氏の來簡」と題して長文の手紙が載っており、種々報告し意見を述べている。文明開化の国の西洋人は日本に来ると日本は不潔とか何とか悪口を言うが、理学士佐々木忠次郎の話によると仏国船中でコレラが発生し死者が出、マルセーユ沖の島の病院で検疫があった。しかしその施設はお粗末で不潔であった。また自分も現にベルリンの大道で夕方から夜にかけて放尿する男を何人も見かけた。これが西洋流の文明開化の真相だ、と日高は怒っている。しかるに西洋人の口まねをして得意然とした日本人がいるのは傍ら痛いことだ。田中館愛橘理学

士によると、通信が発達するとドイツでは大商人は田舎の別荘に住み、郵便電信電話等で番頭たちに指示する。学者も騒がしき都会には住まず、却ってその方が良い場合が往々にしてある。自分も帰国したらなるべくそうしたいと語っていることを紹介し、日高も賛意を表している。村田謙太郎医学士については病氣も次第に良くなり、近く静養先のハルツ山からベルリンに戻ってくる筈だと述べている。次いで1889年（明治22）7月22日開催の和独会のことに言及している。和独会はベルリン東洋語学校の日本語科の学生とベルリン在留の日本人が和気相合のうちに日本語とドイツ語の練習をする会である。当夜は50人余の出席があり盛会であった。ドイツ人は概して外国語の能力が高いとした上で、最後に日本語が大抵のところ通じるようになれば誠に喜ばしいと述べ、それで先日和独会より招待の手紙が来たときに返事は日本語で認めたという。

大正3年11月17日には「故日高文学士満二十年祭」が青山墓地の彼の墓前で行われ、その時の記事が学士会月報第321号（大正3年12月）に掲載された。これを読んだ工学博士の大竹多氣が同誌第324号（大正4年2月）に「故日高文学士の書翰」を寄稿、日高のベルリン時代の独文書簡を長短6通紹介した。大竹によると、日高はベルリンでは「アーテラリー」街8番地の日本婆さんフラウ・フォン・ラーゲルシュトレームの家に宿泊したが、大竹はここで日高と初めて知り合い「一見十年の知己の如く、忽ち莫逆の友」となった。そしてそこで日高から理学博士田中正平、文学博士井上哲次郎、同坪井九馬三、法学博士金井延などを紹介されたという。日高は留学当初はまだドイツ語を話すことも、書くことも余り上手でなかったが、努力の結果大いに進歩した。

最初に大竹が日高からもらった手紙は次のごときものであった。（明治22年1月30日付）

Mein liebes Otakechen !

Erlauben Sie mir um der Uebung willen auf dem Deutschen zu schreiben. Und wenn mein Schreiben den grammatischen Regeln und den rhetorischen nach nicht geht zu verstehen, so ahnen Sie bloss. Wenn es zweideutig ist, so glauben Sie, dass ich das schönere, bessere, lieblichere, japanischere, patriotischere und das unschuldigere meine

Bitte, schreiben Sie uns so oft als Sie können. Zuweilen stossen Sie aus dem Rauchen Ihren Kopf, hinauf und werfen Ihren Blick auf Berlin — Berlin muss Ihnen jetzt zurücksehenswerth scheinen! Fühlen Sie sich es nicht, mein Otakechen !

Ihr gutes u. komisches Freundchen H. M.

この書に煙（Rauchen）とあるのは、工場の煙のことを指しているのであって、当時大竹はドイツ国内の諸工業地方を巡回していた。日高の手紙は所謂ぶっつけ書きで、少しも推敲を経っていない文である。しかも流暢で巧まざる旨さがあり、親しさとユーモアもある。次の手紙にも同様なことが言える。（同年9月17日付）

Gestern habe ich, lieber Freund, Ihren gütigen Brief erhalten.. Ich danke Ihnen sehr für Nachricht über “Templierung” des Aals. Und ich habe Dickens in der

Stelle, "But eel is eel, there is no doubt about it."

Gestern ist Herr Dr. Tsuboi nach Prag über Dresden fortgefahren. Vorgestern Abend war ein Abschiedfest gehalten für den oben erwähnten Herrn Dr. Acht Herren wohnten dabei. Der Kochmeister, Herr Dr. Hidaka, beschäftigte sich vom 5. Abend bis beinahe 10 in der Küche, *bei seiner vielgeliebten Kochmeisterin*. Für solch eine grosse Gesellschaft, den Aal zu bereiten, ist ein mühsames Geschäft. Doch war der Kochmeister nicht im mindestens wider Willen erschienen. Warum? Das versteht sich von selbst! Herr Hof-photograph Harada wohnte auch bei. Nachdem das Fest vorüber war, hat er photographiert die ganze Gesellschaft, und auch sich selbst. Er sagt, das Bild ist gut getroffen. Und ich glaube, der Kochmeister würde am *bisyonensten* aufgenommen, weil er wirklich ist. Das Aufnehmen fand statt mit dem Licht des Magnesiums. (後略)

坪井九馬三がベルリン大学からプラグ大学に転学するに際して、送別会が開かれ8人が集まった。日高が料理を担当、ウナギの蒲焼きを作ったというが、大竹によるとその味は天下一品だったという。「宮廷写真家・原田」と書いているが、これは当時ベルリン大学に留学していた内務技師の原田貞介のことだろう。原田が撮った写真ではユーモアをこめて自分（日高）が一番美少年的に写っているだろうと自慢している。引用は省略したがこの手紙の終わりに「近頃僕は言葉がこんな調子で出てくる、扱々、日本のゲーテやシラーが今に出来ることだろう」と述べて、おどけている。

清浦奎吾とドイツ警察大尉ヘーン



清浦奎吾

東京の隅田川沿いの墨田区向島2丁目5-17番地にある三囲神社は倉稲魂命（うがのみたまのみこと）を祭神とする古い神社である。その境内の奥まった一角にプロイセン警察大尉ヘーン（Heinrich Friedrich Wilhelm Höhn, 1839-1892）の記念碑が建っている。明治27年11月の日付のある「晋国警察大尉ヘーン君表功碑」と題するその碑文は今日ではかなり風化して読みにくくなっているが、これは明治18年から23年まで日本の警察制度や事務の改良のために貢献したヘーンの功績が顕著であるところから、当時警察官中の有志が拠金して建てたもので、碑文は当時司法次官だった清浦奎吾（1850-1942）の撰にかかるものであった。篆額は枢密院議長で陸軍大将の山縣有朋による。碑文はかなりの長文で、ヘーンの日本での功績が詳しく書かれていると同時に、ヘーンと清浦は肝胆相照らす仲であったことを窺わせる。またその死を惜しむ真情に溢れている。